

展示にあたって

2015年度は、1985年に平塚市と東海大学が交流提携を始めてから30年の節目の年であり、9つの記念事業が行われました。その記念事業のひとつとして、『平塚市・東海大学交流提携30周年記念 東海大学付属図書館特別図書展』を、今年1月7日から11日までの5日間、平塚市美術館で開催しました。

この展示会では、東海大学が所蔵する貴重書の中から、「平塚」「神奈川」「源氏物語」といったテーマに沿って展示し、多数の来場者に好評をいただきました。

しかし、会場や期間の都合で、興味を持ちながら展示会をご覧いただけなかった方々も少なからずおられるのではないかと思われます。

そこで今回は、平塚市美術館で展示した資料を若干見直し、更に「百万塔陀羅尼」「エジプト誌」などの資料を加え、展示会を開催することにしました。

今回の展示を通して、多くの方々に図書館への興味を持っていただき、足を運んでいただけたら幸いです。



平塚市美術館における展示会の様子

平塚、神奈川に関する資料

1. 万葉集旁註 (マンヨウシュウ ボウチュウ)

惠岳著

京都 出雲寺文治郎、出雲寺和泉掾刊 寛政元年 (1789)

万葉集は、奈良時代に成立した日本最古の歌集。編者には諸説あるが、歌人・大伴家持が編纂したとの説が有力で、成立は天平宝字3年(759)頃とみられている。平仮名・片仮名が成立する以前の歌集のため、漢字の音訓を用いて日本語を表した万葉仮名と呼ばれる表音文字が特徴である。舒明天皇の時代から淳仁天皇の時代までおよそ130年に渡る期間の、皇族・貴族・一般民衆など、幅広い階層の人々が詠んだ歌約4500首が収録されている。本資料はこの万葉集に江戸時代の僧・惠岳が注釈を加えた研究書で、過去の所有者による朱墨の書き入れが見られる。

14巻「東歌」の項目には、万葉仮名で「相模禰乃 / 乎美禰見所久思 / 和須禮久流 / 伊毛我名欲妣氏 / 吾乎禰之奈久奈 (相模嶺の小峰見そくし忘れ来る妹が名呼びて我を音しなくな)」との詠者不明の歌が収録されており、「契沖云相模ネノ面白ニシハシ忘クル妹力名ヲ又思出テナクトナリ」との注釈がつけられている。この「相模嶺」は大山を指すといわれ、湘南校舎2号館前に歌碑がある。大山の峰の面白さにしばし忘れていた愛しい妹(妻・恋人)の名をまた思い出してしまい、泣いてしまった、という意味に解釈されている。相模国に居住していた男が、防人等の賦役で家を離れ、後に残してきた妻を思って詠んだ歌であると思われる。

注釈に名のある「契沖」は江戸時代前期の僧で『万葉代匠記』などの著作のある国学者でもあった契沖(契沖とも書く)を指しており、惠岳が先人の著した万葉集の研究書を参考にしながらこの注釈書を制作したことが分かる。

2. 十番切 (ジュウバンギリ)

作者不明 画者不明

寛文・延宝頃 (1661-1681) 制作

鎌倉時代末期から室町時代前期にかけて成立した軍記物語「曾我物語」のうち、十番切の段を絵巻に仕立てたもの。十番切とは、曾我十郎祐成と弟の曾我五郎時致が、源頼朝配下の武者十人と戦った事を表している。曾我物語は、伊豆国の武将河津祐泰の子として生まれた兄弟が、所領争いから父を殺害した工藤祐経への仇討ちを誓い、18年後に富士の裾野で祐経を討ち果たす物語である。兄弟に降りかかる苦難や、兄祐成とその恋人、大磯宿の遊女虎御前の悲恋が人々の共感を集め、日本三大仇討物語の一つとして人気を博した。虎御前は平塚唐ヶ原で出生、後に大磯宿で遊女となつたとされ、江戸期の旅行案内書にもそのことが解説されている。

本資料『十番切』は、曾我物語の巻9から巻11までを題材とする幸若舞曲を絵入りの読み本としたもので、十番切を題材とする絵入り物語は非常に珍しく、稀少な資料である。



『十番切』より。仇の祐経を討ったあと、頼朝の宿舎を襲撃した兄弟は、兄の祐成が討ち取られ、なおも弟の時致が寝室に迫るが、女装して待ち構えていた五郎丸という名の武将に油断した所を生け捕りにされる。

3. 東海道五十三駅勝景 (トウカイドウ ゴジュウサンエキ ショウケイ)

歌川貞秀画

江戸 丸屋徳造ほか刊 万延元年 (1860)

東海道の五十三駅のうち、7番目の平塚から14番目の吉原までが描かれた案内図。平塚近辺では「馬入川落口 サカミ川トモ云」「八幡宮」「カウライ寺村」「化粧坂此所平地」「元花水橋」「権現鳥井」「花水橋」「虎ノヤシキ跡」、小田原では「箱根山名産 サンセウノ魚」など、街道沿いの名所、名物が鳥瞰の構図で描かれた絵と共に紹介されている。
作者の五雲亭貞秀は幕末から明治初期を代表する浮世絵師で、歌川貞秀、橋本玉蘭とも称し、俯瞰による構図の風景画、開国以降流入して来た異国の文物などを取材して書いた横浜絵などが有名である。東海大学図書館は、本資料の他にも「富士詣独案内 (本展示会資料番号 11)」「相模国大隅郡大山寺雨降神社真景 (同 12)」「横浜開港見聞誌 (同 17)」などの貞秀の作品を所蔵している。



4. 東海道名所図会 (トウカイドウ メイショ ズエ)

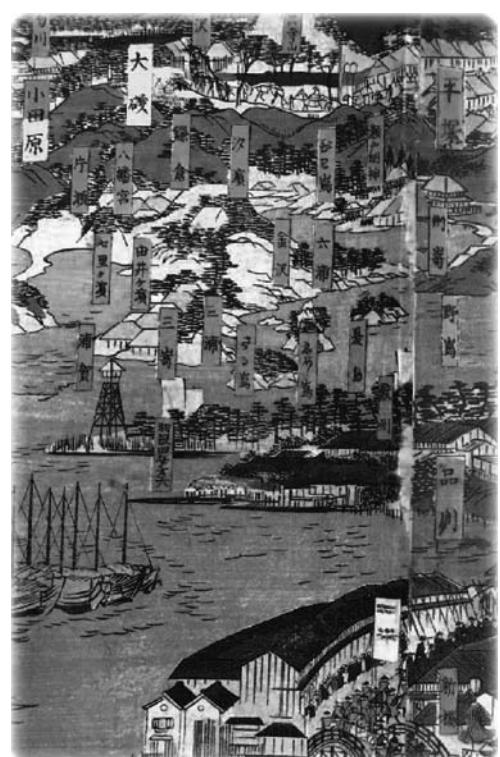
歌川芳虎, 月岡芳年画

江戸 大黒屋金之助版 元治元年 (1864)- 慶応元年 (1865)

幕末から明治時代にかけて活躍した浮世絵師歌川芳虎、月岡芳年による東海道の名所錦絵。12枚が芳虎画、末尾の3枚が芳年画で、元はそれぞれ別の作品であったものを繋いで絵巻物に仕立ててある。平塚近辺では馬入川、高麗山が描かれ、平塚と大磯の間に三浦半島があるなど、地勢に独特の変形が加えられている。

歌川芳虎は歌川国芳の門人で、安政5年(1858)に破門され、一門を離れるものの、その後も精力的な活動を続けて横浜絵、開化絵などを多く手がけ、明治初期には歌川貞秀と人気を争う絵師であった。号は一猛斎など。

月岡芳年もまた国芳の門人で、12歳で弟子入り、武者絵・美人絵などを幅広く手がけ、明治に入ってからは新聞の挿絵なども手がけたため、その作品は数千点から一万点に及ぶとみられる。写真や西洋画の流入に伴い浮世絵が衰退を見せた明治期にあって独特の画風で人気を博し、「最後の浮世絵師」とも呼ばれる。号は一魁斎など。



5. 五十三次名所図会 平塚 (ゴジュウサンツギ メイショ ズエ ヒラツカ)

歌川広重画

江戸 蔦屋吉蔵版 安政 2 年 (1855)

うたがわひろしげ
歌川広重による東海道名所錦絵は「東海道五十三次」が有名だが、本資料「五十三次名所図会」は広重晩年の作。画中には「五十三次名所圖会 八 平塚 馬入川舟渡し 大山遠望」との文があり、馬入川(相模川)の渡し場から大山を遠望したものであることが分かる。当時、江戸を防備する軍事上の目的から、大河には架橋されておらず、渡河には舟が利用された。山梨県山中湖を源流とする相模川は、相模国内に全部で 10箇所の渡し場が存在しており、東海道にある馬入渡は厚木渡と並んで最も交通量の多い場所であった。この渡し場に木製の橋がかけられるのは明治 11 年 (1878)、東海道線の鉄橋がかかるのは明治 20 年 (1887) である。

作者の歌川広重は歌川豊広の門人であり、かつては安藤広重とも呼ばれたが、現在では歌川広重と呼ぶのが一般的である。「東海道五十三次」を始め数々の風景画の傑作を残し、ゴッホやモネなど西洋の画家にも影響を与えたことで知られる。号は一遊斎、一幽斎など。



6. 狂歌道中記 (キョウウカ ドウチュウウキ)

六樹園飯盛編；昇亭北寿画

出版者不明 文化 10 年 (1813)

ろくじゅえんめしもり
狂歌師六樹園飯盛が、東海道の各宿場にまつわる狂歌を編集したもの。絵師は葛飾北斎の門人、昇亭北寿。平塚宿は「出女に / 又かならすと / せなひとつ / たゝかるゝ手の / ひらつかの宿」との狂歌が寄せられている。作者は陳芬館読兼。

編者の六樹園飯盛は本名を石川雅望といい、浮世絵師石川豊信の五男として江戸の旅籠に生まれた。狂歌を四方赤良(大田南畝)に学び、以降狂歌師として活躍した。途中江戸払い(罪人を品川・板橋・千住・四谷大木戸および本所・深川の外へ追い払う追放刑)となるものの、その期間は国学に専念して「源氏物語」の注釈書『源註余滴』などを著した。後に江戸の内藤新宿に居を構え、再び狂歌師として晩年に至るまで精力的に活動した。狂名、宿屋飯盛。

7. 東海道中山道道中記 (トウカイドウ ナカセンドウ ドウチュウウキ)

江戸 岡田屋嘉七ほか刊 天保 10 年 (1839)

別名、諸国道中袖鏡。東海道及び中山道の旅行案内書。現代のガイドブックにあたる。街道沿いの名所や各宿場間の距離、旅行に必要な諸経費が紹介されている。

8. 関東十九州路程便覧 (カントウ ジュウキュウシュウ ロティ ベンラン)

樗園長山貫識

江戸 須原屋伊八, 若林喜兵衛刊 嘉永元年 (1848)

関東を中心として北の出羽・陸奥国、西の美濃国までの 19 の国を網羅した路程地図。市内では平塚、金目といった地名が記載されており、坂東札所の一つ金目觀音を示す卍のマークも図中に書き込まれている。

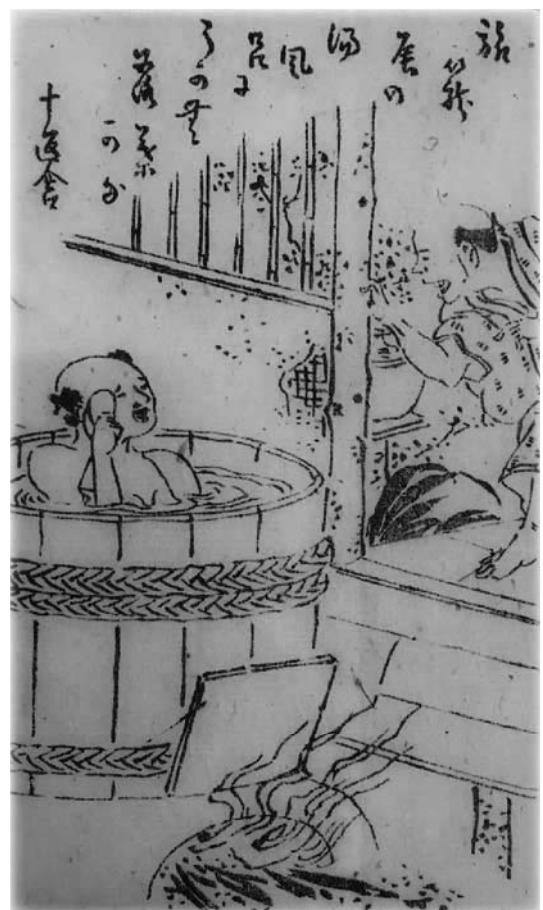
9. 道中膝栗毛 初編 (ドウチュウ ヒザクリゲ ショヘン)

十返舎一九著

江戸 梶屋喜兵衛ほか刊 享和 2 年 (1802)

「東海道中膝栗毛」の題が有名な、^{じっぺんしやいっく}十返舎一九による滑稽本。かつて書物は貴重品であったが、江戸時代に入り幕府が学問・教育を奨励して識字率が向上したこと、紙の量産が可能になったことで一般民衆の間でも広く書物が普及するようになった。平和の続いた文化・文政年間 (1804-1830) は特に町人を中心とした文化が栄え、化政文化と呼ばれた。享和 2 年 (1802) から文化 6 年 (1809) にかけて刊行された「道中膝栗毛」は、化政文化を代表する文学作品の一つであり、同時に一九の代表作でもある。伊勢を目指して江戸を旅立った弥次郎兵衛と喜多八という二人のらくら者が名所を観光しつつ道中で巻き起こす数々の騒動と失敗談を滑稽に描いたこの本は、江戸の民衆に熱狂的に受け入れられ、続編も次々と刊行された。

十返舎一九は本名を重田貞一といい、駿河国の出身である。大坂で武家奉公をしていたが、寛政 5 年 (1793) 江戸に出て戯作者山東京伝などと交流し、黄表紙と呼ばれる大人向けの絵入り物語を何冊か刊行、その後に出版したのがこの「道中膝栗毛」である。



小田原宿にて、五右衛門風呂の入浴法を知らず、下駄を履いて風呂に入る弥次郎兵衛。

10. しづかな流 (シズカナ ナガレ)

中勘助作

東京 岩波書店 昭和 7 年 (1932)

作家、中勘助の随筆。デビュー作『銀の匙』は、夏目漱石の推挙により東京朝日新聞に連載された。本書は大正 14 年 (1925) から昭和 7 年 (1932) まで平塚に居住していた勘助が、日々の生活や周囲の物事を日記調に書き綴った随筆である。

11. 富士詣独案内（フジモウデ ヒトリアンナイ）

歌川貞秀画

江戸 大黒屋平吉版 安政 6 年 (1859)

作者橋本玉蘭は、歌川貞秀の別名。貞秀は北海道から九州までの名所を実際に歩き、富士登山の経験もある旅行家としての側面も持ち合わせており、富士山を左奥に据えて日本橋から久能山までを鳥瞰で描いた本図にはその経験が存分に生かされている。富士山は古来より山岳信仰の対象であったが、江戸時代後半には富士講と呼ばれる富士山信仰が民衆の間で特に盛んになった。本図の版行翌年の万延元年 (1860) には、英國駐日公使ラザフォード・オールコック (本展示会資料番号 21. The capital of the tycoon の著者) が外国人としては初の富士登頂を果たしている。



12. 相模国大隅郡大山寺雨降神社真景（サガミノクニ オオスミグン オオヤマデラ アフリジンジャ シンケイ）

歌川貞秀画

江戸 林屋庄五郎版 安政 5 年 (1858)

五雲亭 (歌川) 貞秀による大山講の図。丹沢山地の東部に位置する大山は富士山同様、古来より山岳信仰の対象であった。別名を雨降 (阿夫利) 山ともいい、雨乞いの神、稻作の神、大漁の神として、関東一円に広く信仰をあつめた。開山 (寺院を開設すること) は東大寺初代別当の僧・良弁との伝承がある。江戸時代は大山信仰の一つである大山講が盛んになり、江戸から地理的に近いこと也有って、大山詣が賑わった。本図にも詰めかける参拝客の様子が描かれている。



13. 相巒大山絵図（ソウシュウ オオヤマ エズ）

佐藤坊版 江戸後期・明治頃

大山登山のための案内図。木版によるものと思われる。

14. 相陽中郡大山眞景之図（ソウヨウ ナカグン オオヤマ シンケイ ノズ）

椎野喜太郎画作

秦野 椎野喜太郎版 明治 35 年 (1902)

大山登山のための案内図。銅版によるものと思われる。

15. 相州小田原道了大薩埵回向院ニテ開帳参詣群集の図（ソウシュウ オダワラ ドウリョウ ハイサツタ エコウインニテ カイチョウ サンケイ グンシュウ ノズ）

歌川広重 (3 代) 画

東京 上布屋重蔵版 明治 4 年 (1871)

3 代歌川広重による錦絵。明治 4 年 (1870)、東京両国回向院にて、大雄山最乗寺 (南足柄市) の出開帳が行われた際の様子を描いた錦絵。出開帳とは寺院が所蔵する本尊を遠方まで赴いて公開すること。最乗寺は応永元年 (1394)、相模国糟谷 (現在の伊勢原市) 出身の曹洞宗の僧・了庵慧明が開山したと伝えられている。この慧明の弟子で、開創に助力したのが道了薩埵である。道了は後に最乗寺を守護することを言い残して天狗へと化し、白狐に乗って飛び去ったとの伝説がある。図中にみえる鳥天狗の飾り、群衆が身につけた天狗の面や九葉の羽団扇は道了にちなんだものである。

3 代歌川広重は初代広重の門人で、本名を後藤寅吉という。初代の養女お辰が 2 代広重と離縁した後に婿入りの形で 2 代広重を名乗ったが、本来は 3 代にあたる。主に横浜絵・開化絵の分野で名を残した。江戸後期は西洋から輸入された化学染料の画材が絵師の間でも流通しており、北斎の使用したペロ藍 (ベルリン藍、プルシャンブルー) などが有名だが、万延年間からは洋紅ことアニリンの輸入が始まり、本図に見られるような鮮やかな赤の色彩が生まれた。

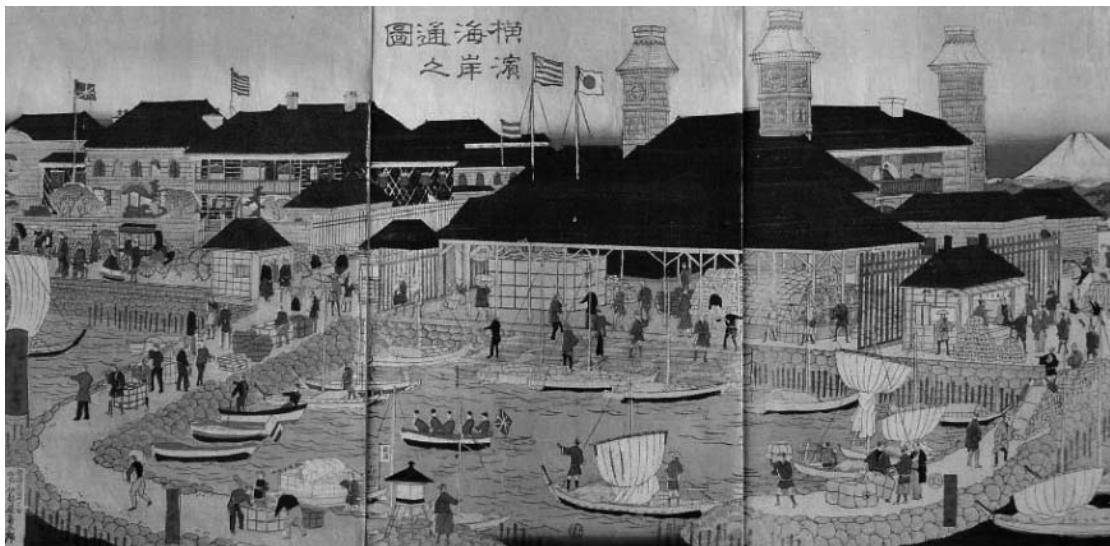


16. 横浜海岸通之図（ヨコハマ カイガンドオリ ノズ）

歌川広重（3代）画

江戸 伊勢屋喜三郎版 明治3年（1870）

3代広重による横浜港の錦絵。安政5年（1858）の日米修好通商条約締結以降、幕府は、横浜・長崎・箱館・神戸・新潟の五港での自由貿易を認可した。横浜村には二本の直線形の波止場が設けられ、東側が外国との通商用、西側が日本国内用として運用された。慶応3年（1867）には東の波止場が湾曲した形状へと造成され、その形から「象の鼻」と呼ばれるようになった。本図では既に「象の鼻」を見ることができる。



17. 横浜開港見聞誌（ヨコハマ カイコウ ケンブンシ）

歌川貞秀画作

出版者不明 文久2年（1862）- 慶応元年（1865）

開港以降、横浜に設けられた居留地を貞秀自らが取材、商館や「異人屋敷」と呼ばれた住居の様子、外国の珍しい文物や風習を文と絵に仕立てて本にしたもの。

18. 横浜絵葉書 190枚（ヨコハマ エハガキ 190マイ）

横浜 トンボヤほか版 明治-昭和初期

明治から昭和初期にかけての横浜名所絵葉書。

19. 箱根名所図絵（ハコネ メイショ ズエ）

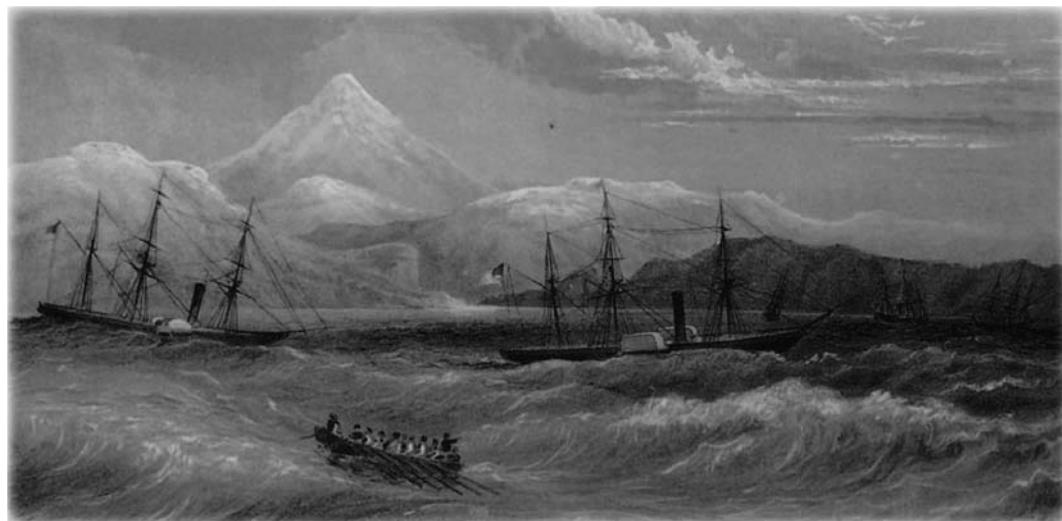
吉田初三郎画

東京 妹尾春太郎 大正14年（1925）

大正6年（1917）初版の箱根案内図。画者吉田初三郎は鳥瞰図を得意とする地図制作者で、「大正の広重」とも呼ばれ、多くの観光案内絵地図を手がけた。

20. **Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan** (日本遠征記)
マシュー・カルブレイス・ペリー著
ワシントン A.O.P. Nicholson 1856年

嘉永6年(1853)に日本へ来航したペリー提督本人の航海日誌、軍事上の通信文、乗組員らの日記をもとに、ペリー監修、フランシス・ホーク編集で刊行したもの。日本及び琉球、中国の風習・植生などが取材されており、久里浜に上陸するペリー一行の様子などが彩色の銅版画によって描かれている。展示の図は、一度目の来日時に小田原沖を通過する艦隊。



21. **The capital of the tycoon** (大君の都)
ラザフォード・オールコック著
ロンドン Longman, Green, Longman, Roberts & Green 1863年

初代駐日イギリス公使、ラザフォード・オールコックによる日本滞在記。オールコックは、はじめ軍医であったが、アモイ駐在領事任命を皮切りに福州・上海・広東の領事を務め、安政6年(1859)日本駐在総領事に任命。万延元年(1860)には外国人としては初めて富士山に登頂、文久元年(1861)には長崎から陸路で江戸に至る旅行をし、これに憤激した水戸藩の尊攘派志士によって同年5月にオールコックが宿舎としていた江戸高輪の東禅寺が襲撃される事件が起こった(東禅寺事件)。オールコック自身は襲撃者が寝室を突き止められなかった為難を逃れたが、書記官オリファントらが負傷した。事件後も下関戦争、文久遣欧使節の派遣などに関わり、幕末の日本において大きな影響力を持った。本書は開港直後の日本における外交交渉を知るうえで貴重な資料である。Tycoon(大君)とは徳川將軍を指す。



22. A trip into the interior of Japan (日本内地の旅)

J.H. サンドウィズ著

横浜 Japan Gazette 1872 年

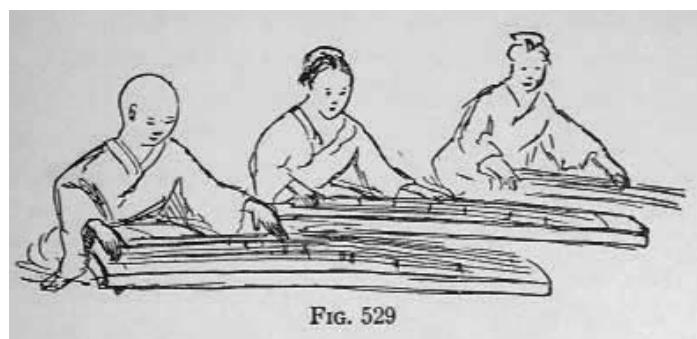
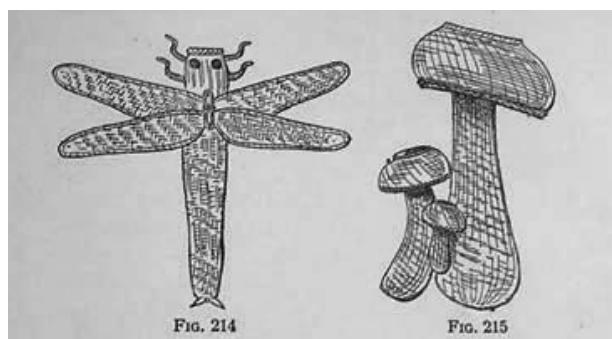
英國海兵隊中尉 J.H. サンドウィズによる日本旅行記。1871 年 8 月 20 日に横浜を出発、東海道を通過して静岡に到着。富士山麓で白糸の滝などを観光しながら甲州街道で下諏訪へ入り、中山道で江戸方面へと帰る 32 日間の旅であった。サンドウィズはアマチュアのカメラマンでもあり、鶏卵紙による写真が本書にも挿入されている。鶏卵紙は写真の印画技法の一つで、材料に卵白を用いたことからこの名がある。

23. Japan day by day (日本その日その日)

エドワード・S・モース著

ボストン、ニューヨーク Houghton Mifflin 1917 年

米国の動物学者エドワード・S・モースによる日本滞在記。モースはメイン州に生まれ、メイン州立大学、ハーバード大学などの教授を歴任、明治 10 年 (1877) に腕足類の研究のため来日した。横浜から東京へ向う列車内から大森貝塚を発見したエピソードは良く知られている。貝塚の発掘を始め、ダーウィンの進化論を紹介するなど、日本の考古学・人類学・動物学の発展に多大な寄与をし、豊富なスケッチや陶器などのコレクションを残した。『日本その日その日』は、1877 年の初来日から、1882 年の再来日の滞在中にモースが書いた日記やスケッチを元に再構成されたもので、明治初期の日本の風習や人々の暮らしの様子が克明に記録されている。



『Japan day by day』挿図

幕末・明治期の旅行に関する資料

24. 慶応二年型パスポート用紙 (ケイオウ 2 ネンガタ パスポート ヨウシ)

長崎 日本外國事務局 慶応 2 年 (1866)

慶応 2 年 (1866) に幕府が発行した日本初のパスポートの用紙。同年、幕府は修学及び商業の目的に限って身分に関係なく海外渡航を許可する布達を発しており、それに伴い日本国が発行する証書としてのパスポートが制定された。この用紙に居住地や年齢、身長、体形などの身体的特徴と渡航理由を書き込んで使用した。

25. 万国人物図（バンコク ジンブツズ）

城義隣画

江戸後期

江戸中期の天文学者西川如見が著した『四十二国人物図説』（享保5年刊）を元に、世界各国の人種を図譜に仕立て、彩色絵巻としたもの。江戸後期の長崎の町絵師、城義隣の落款が巻末にある。万国人物図は多くの類似した写本が流通しているが、本資料は中国で活動したフランドルのピテム（現在のベルギー北西部）出身の宣教師フェルディナント・フェルビースト著『坤輿外紀』から解説に補記を行い、ロシア人の項目に文化元年（1804）来日したニコライ・レザノフをはじめとするロシア遣日使節団の紹介を付け加えている点に特徴がある。



『万国人物図』より、オランダ人の図

26. 世界旅行万国名所図絵（セカイ リヨコウ バンコク メイショ ズエ）

青木恒三郎編輯、南枝醇閱

大阪 青木嵩山堂 1885年

大阪心斎橋にあった出版社、青木嵩山堂が店主の青木恒三郎による編集で明治18年（1885）に出版した、世界旅行のガイドブック。北米からヨーロッパ、オセアニア、中東、インド、極東を経て日本へと戻る順路に沿った各国の名所や文化が紹介されている。精緻な銅版画による挿絵が特徴。装丁はそれまでの和装本ではなく、洋紙を使用し、背表紙をつけて洋装本を模したものである。

桃園文庫より、源氏物語に関する資料

桃園文庫とは

近代の古典文学研究において、画期的な足跡を残した池田亀鑑博士 (1896-1956) により収集されたコレクション。源氏物語を中心に、伊勢物語、土佐日記、徒然草など多くの古典文学に関する資料で構成されており、総数約 8400 点にのぼる膨大なこのコレクションは「桃園文庫」と呼ばれる。元東海大学文学部長・付属図書館長原田敏明教授が池田博士の義兄にあたり、池田家から文庫の保存移譲を一任されていた経緯から、桃園文庫は現在、その大部分が東海大学に所蔵されている。

27. 源氏物語絵図 (ゲンジ モノガタリ エズ)

歌川国貞画

江戸 錦森堂版 江戸後期

うたがわくにさだ
歌川国貞による源氏物語の錦絵。展示箇所は若菜の巻を題材としており、光源氏の息子夕霧たちの蹴鞠の最中に、女三宮の飼い猫が御簾の内から逃げ出し、柏木が女三宮を垣間見ることになる場面を描いている。

国貞は江戸の材木問屋に生まれ、歌川豊国の門弟となった。弘化元年 (1844) に豊国を襲名する。2代豊国を名乗ったが、実際には2代目豊国が既に存在していたため、3代豊国にあたる。生涯を通じて膨大な作品を残し、美人画や源氏絵などが有名である。号は五渡亭・香蝶楼など。



28. 源氏香の図 (ゲンジコウ ノズ)

歌川国貞画

江戸 山本屋平吉版 天保・弘化年間 (1830-1847)

歌川国貞 (3代豊国) による源氏香の図。源氏香とは、組香と呼ばれる香道の競技の一つで、順番に回される五つの香をきき分け、その異同を五本の縦線と、縦線を繋ぐ横線による図で表し、正解を競うものである。図形には「桐壺」と「夢浮橋」を除く源氏物語五十二帖の名前が付されている。香道における源氏香の図は単なる図形であったが、意匠の素晴らしいから、香道とは関係なく小袖の模様や、饅頭の焼印、家紋などに取り入れられるようになった。その過程において、当初は存在しなかった「桐壺」と「夢浮橋」の図形が追加された。

29. 源氏十二月絵巻 (ゲンジ ジュウニガツ エマキ)

作者不明

十二の月ごとに源氏物語の各帖を当てはめた絵巻。

30. 源氏かるた (ゲンジ カルタ)

葛飾北斎画

出版者不明 江戸後期

かつしか ほくさい

葛飾北斎による彩色刷の源氏かるた。「風流源氏歌かるた」ともいう。江戸期に入り、出版文化の発達によって、従来は貴族や武家層が継承を担って来た古典文学が一般民衆の間にも浸透した。北村季吟著『湖月抄』など、注釈書も盛んに読まれ、江戸後期には柳亭種彦が物語の舞台を室町時代に翻案した娯楽本『修紫田舎源氏(にせむらさきいなかげんじ)』が大流行した。それに伴い、かるたや双六の題材としても源氏物語が取り入れられた。

葛飾北斎は、江戸期を代表する浮世絵師であるのみならず、日本を代表する画家の一人である。風景画・美人画・歴史画など、あらゆる絵画の分野を手がけ、特に「富嶽三十六景」内の「神奈川沖浪裏」は、フランスの印象派にも影響を与える等、70年あまりという長い活動の間に多くの傑作を生み出した。



31. 源氏絵 (ゲンジ エ)

作者不明

源氏物語五十四帖を題材とし、屏風絵などの下絵として描かれたものと思われる。

和の特別図書

32. 十二月あそび (ジュウニガツ アソビ)

作者不明

江戸中期

一年十二か月、月ごとの京都の習俗を絵巻に仕立てたもの。



『十二月あそび』七月の場面 (部分)。盆踊りに興じる若者たち

33. 大黒舞 (ダイコクマイ)

飛鳥井雅豊写 延宝頃 (1673-1681)

室町末期頃成立の御伽草子「大黒舞」を奈良絵本に仕立てたもの。大悦の助という名の孝行者が極貧の両親を思って清水觀音に祈ったところ、大黒天と恵比寿三郎の恵みを受けて出世し、後に壬生の中納言の娘と結婚して末永く繁盛するというあらすじである。御伽草子とは広義には室町時代から江戸初期にかけて作られた短編の物語小説のことを指し、狭義には江戸初期、大坂の本屋渋川清右衛門が出版した23篇の短編物語草子を指す。この御伽草子を主な題材とし、貴族や武家、富裕な町人層の婦女子を対象に作られた彩色絵入りの写本が奈良絵本である。豪華な装丁を尽くした嫁入り道具として揃えられることが多かったため「嫁入り本」の名もある。

表紙は金襷緞子装。「英王堂蔵書」の印があり、イギリスの日本研究家バジル・ホール・チェンバレンの旧蔵であることが分かる。書写者は江戸中期の公卿・
飛鳥井雅豊。



『大黒舞』より、祝いの舞をまう大黒天

34. 百人一首かるた (ヒヤクニンイッショ カルタ)

出版者不明 江戸中期

小倉百人一首とも呼ばれる。鎌倉時代初期の歌人・藤原定家の撰による、奈良時代から鎌倉初期に至る歌人の秀歌百首の歌集。定家の好みが反映された雅やかで流麗な作品を中心に収録されており、王朝和歌の代表的な歌集として、室町時代から現代に至るまで愛好者が多い。江戸時代初期には、百人一首を覚えるための教育的な遊戯として「歌かるた」が誕生し、正月の遊びとして定着した。本資料は江戸中期頃に制作された木版刷のもので、金箔砂子、金箔裏打ちを施された豪華なかるたである。



35. 百万塔陀羅尼 (ヒヤクマントウ ダラニ)

宝亀元年 (770) 制作

印刷年が明らかなものの中では、世界最古の印刷物（木版印刷か銅版印刷かとの論争は百年以上になるが決着がついていない）で、奈良時代の宝亀元年 (770) に作られた。塔は轆轤細工で作られ、三層の塔から成る。彫り抜かれた上部の中には「無垢淨光大陀羅尼經」が納められ、「九輪のぎぼし」がその栓となっている。



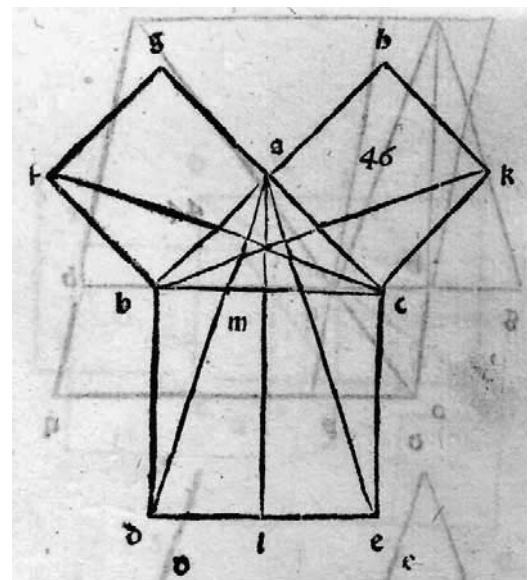
洋の特別図書

36. Euclidis Megarensis (メガーラのユークリッド)

ルカ・パチョーリ編

ヴェネツィア A. Paganus Paganinus characteribus elegantissimis accuratissime imprimebat 1509年

紀元前3世紀前半、ギリシアの数学者・物理学者であったエウクレイデス(英名ユークリッド)がギリシア数学を集大成し、幾何学論を展開したものが『原論』である。ギリシア語で書かれたこの著作は後にアラビア語訳され、12世紀にはラテン語訳された。イタリアの数学者ヨハンネス・カンパヌスがラテン語訳に注釈をつけたものが「カンパヌス版」と呼ばれ、展示の資料はこのカンパヌス版と同じくイタリアの数学者であるルカ・パチョーリが解説を加えたものである。書名『メガーラのユークリッド』は、出版当時、古代ギリシアの都市メガラ出身の哲学者エウクレイデスと、本書の著者であるアレクサンドリアの数学者エウクレイデスが混同されていたことによる。



『メガーラのユークリッド』より、「直角三角形において、直角の対辺の上の正方形は、直角をはさむ2辺の上の正方形の和に等しい」

37. De re metallica (金属について)

ゲオルク・アグリコラ著

バーゼル Apvd Hieron Frobenivm et Nicolavm Episcopivm 1556年

ドイツの鉱山学者ゲオルク・アグリコラ(ゲオルギウスとも)による採鉱・冶金技術の書。1556年スイスでラテン語版が出版、続いてドイツ・イタリア語版などでも出されているが、1912年版のフーバー(元米国大統領)夫妻の英訳により有名になった。300葉に近い挿絵はゲーテが賞賛するほど美しく、当時の鉱山業の様子を良くあらわしている。翻訳書に『近世技術の集大成: デ・レ・メタリカ全訳とその研究』がある。

アグリコラはザクセンのグラスハウ出身。本名はゲオルク・バウアーといい、アグリコラとラテン名に改めたのは1518年にツヴィッカウでギリシア語の教師となった頃からである。医学・鉱山学・岩石学を学び、ライプツィヒ大学講師をつとめたのち、ボヘミアのヨアヒムスターで鉱山と岩石を研究。その後はケムニッツ市長などを歴任したが、厳肅なカトリック教徒であったため、宗教改革の論争に巻き込まれる形で1555年に没した。

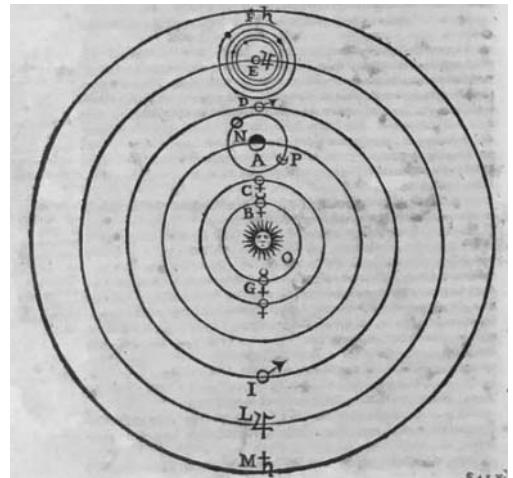


LIBER OCTAVVS.
Canaliculis transuersi A. Vas arenae subiectum B. Vas alterum C.
Verum Toringi rotunda caua, quibus digiti transuersi latitudo & altitudo est, simul cum canaliculis ex alijs ad alia pertinentibus in areae capite incidunt: ipsam uero aream contingunt linteis: arena lauanda in caput conficitur & retro ligneo agitatur: quo modo leuia auri ramenta aqua rapit in linea, grauia in cauis resident, quibus cum plena fuerint, caput ablatum in uas inuertitur, & ramenta collecta in aloeu lauantur. Aliqui utuntur area, habente quadrangula caua, quibus deorsum uerius breues sunt receffus auri ramenta recipientes. Alijs est area composta ex asperibus asperis propter minutula refegmina ad eos adhuc adhærentia: que areae sunt loco tegumentorum, quibus nuda est. Ad ea cum arena lauantur auri ramenta non minus adhærent quam uel ad linteis, uel ad pelleis, uel ad cefosis.

38. **De duobus maximis mundi systematibus, Ptolemaico & Copernicano, rationibus vtrinque propositis indefinite disseritur.** (二つの宇宙体系すなわちプトレマイオスとコペルニクス説に関する対話)
 ガリレオ・ガリレイ著
 リヨン Sumptibus Ioan Antonii. Huguetan 1641 年

イタリアの物理学者・天文学者ガリレオ・ガリレイによる地動説の啓蒙の書。日本では『天文対話』の名で知られる。三人の架空の人物による対話という形式でプトレマイオスによる天動説を批判し、コペルニクスによる地動説を弁護した。本書は当時禁じられていたコペルニクスの学説を支持するものであることを理由とし、刊行された 1632 年のうちに発禁処分となった。ガリレオは宗教裁判にかけられ、有罪判決を受けた。翌 1633 年、教皇ウルバヌス 8 世と異端審問所は『天文対話』を禁書とした。

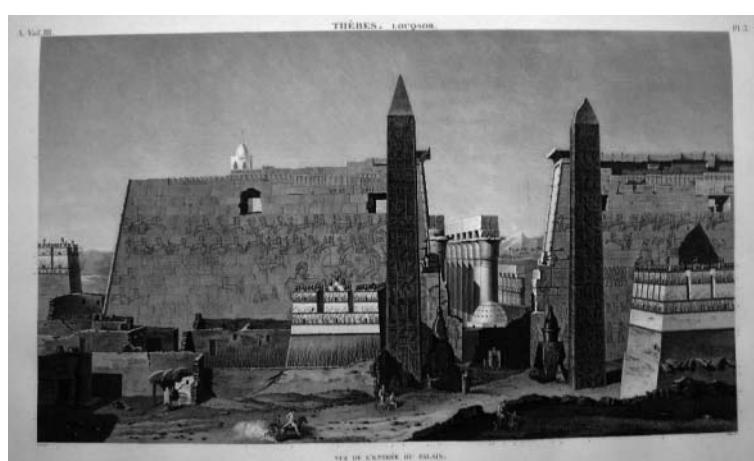
イタリアでは流通を止められたものの、教皇の権威が及ばないフランスやオランダでは何度か刊行されており、展示の資料は 1641 年にリヨンで出版されたラテン語版である。



『二つの宇宙体系～』より、地動説を表す図

39. **Description de l'Égypte : ou, Recueil de observations et des recherches qui ont été faites en Égypte pendant l'expédition de l'armée française** (エジプト誌)
 ナポレオン・ボナパルト製作
 パリ Imprimerie impériale 1809-1828 年

1798 年、イギリスのインド航路遮断を狙ったナポレオン・ボナパルトは、5 万の軍勢を率いて航路の経由地であるエジプトへと上陸したものの、イギリス海軍ネルソン提督の抵抗により遠征は失敗に終わり、エジプトに留まることとなった。この遠征にナポレオンは物理学者ガスパール・モンジュ、ジョゼフ・フーリエらから成る 160 名あまりの学術調査団を同行させ、エジプトの遺跡や動植物の研究にあたらせた。その成果をまとめたのが本書『エジプト誌』である。

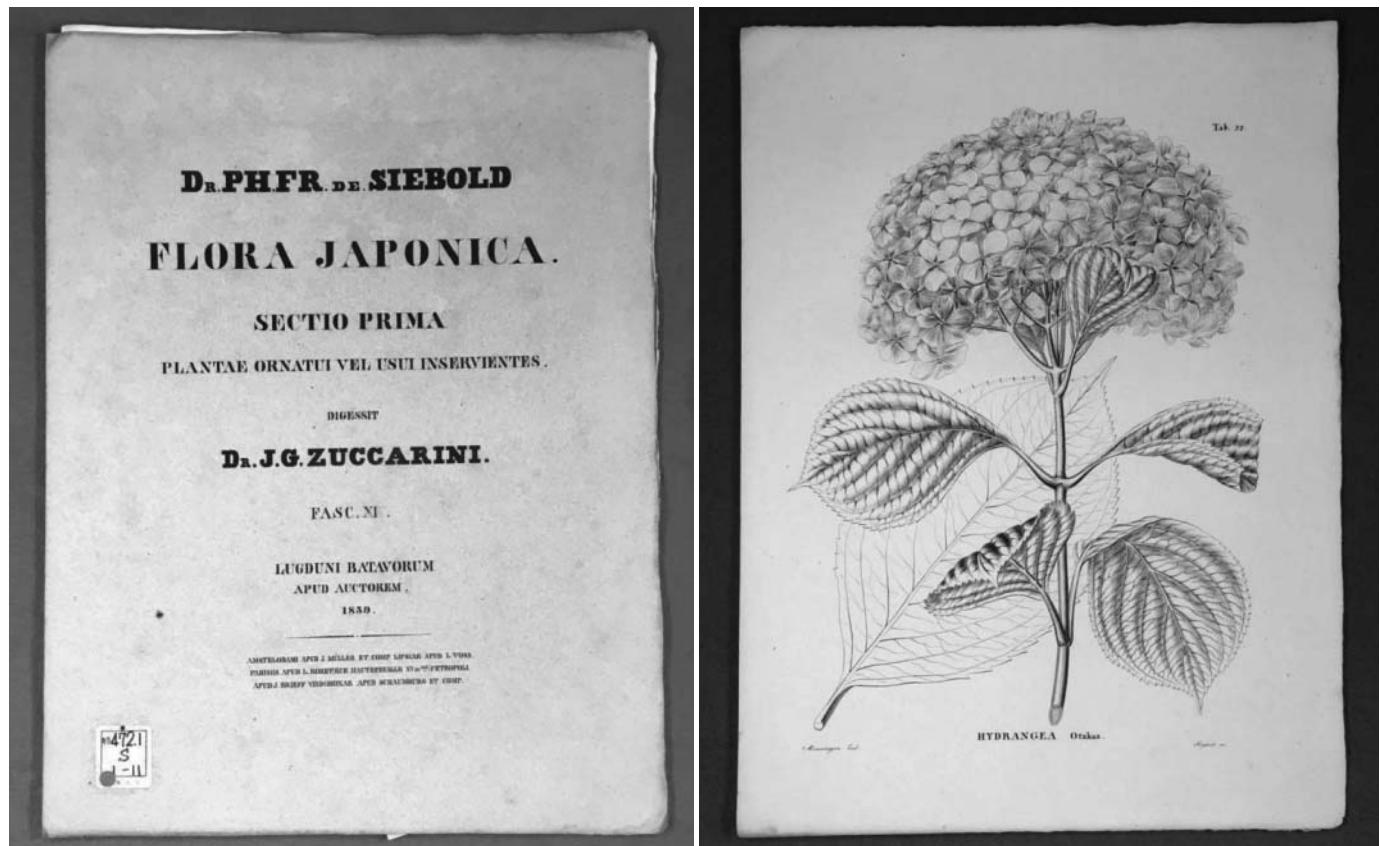


『エジプト誌』より、ルクソール神殿

40. **Flora Japonica** (日本植物誌)

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト, ヨーゼフ・ゲアハルト・ツッカリーニ著
ライデン Apud Auctorem 1835-1844 年

ドイツの医者・博物学者、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの著書。1823年、オランダ商館の医師として来日。帰国後、『Nippon』(1832-52)、『Fauna Japonica』(1833-50)、『Flora Japonica』(1835-70)などを出版した。本書はシーボルトが日本で収集した植物標本や、川原慶賀などの日本人絵師が描いた下絵をもとに作成され、ドイツの植物学者ツッカリーニが解説を共著。天保6年(1835)から明治3年(1870)にかけて30分冊として刊行、当館は30分冊のうち第1分冊から第25分冊まで所蔵している。翻訳書に「日本植物誌：シーボルト『フローラ・ヤポニカ』」(八坂書房刊)などがある。



『日本植物誌』より、オタクサ(アジサイの一種)の図版。長崎におけるシーボルトの妻、楠本滝の愛称「お滝さん」からこの名が取られたといわれている。

41. **Photographs of Einstein with his signature** (aignshutain shomen ni shomei)

撮影者不明 1930年代

特殊相対性理論などで知られるドイツ出身の物理学者アルベルト・aignshutainの署名入り写真。1933年、アドルフ・ヒトラー率いる国家社会主義ドイツ労働者党(ナチス)が政権を獲得、ユダヤ系であったaignshutainは迫害を恐れて滞在先のアメリカからベルギーの港町デ・ハーン(仏名ル・コック)に居を移した。この写真はその当時のものと思われ、背景にあるヴィラ「サボヤード(Savoyarde)」は現存している。

古地図

42. *Orbis terrarvm vetiribus cogniti typvs geographicvs*

ヤン・ヤンソン作

出版者不明 1640 年

オランダの地図学者・出版者ヤン・ヤンソン（ヤンソニウスとも）が作成した世界地図。ユーラシア大陸が中心とされており、アフリカ南部やアメリカ大陸、オーストラリア大陸などは描かれていません。

43. *Nova totius terrarum orbis geographica ac hydrographica tabula*

ヨドクス・ホンディウス作

パリ Chez M. van Lochem 1636 年

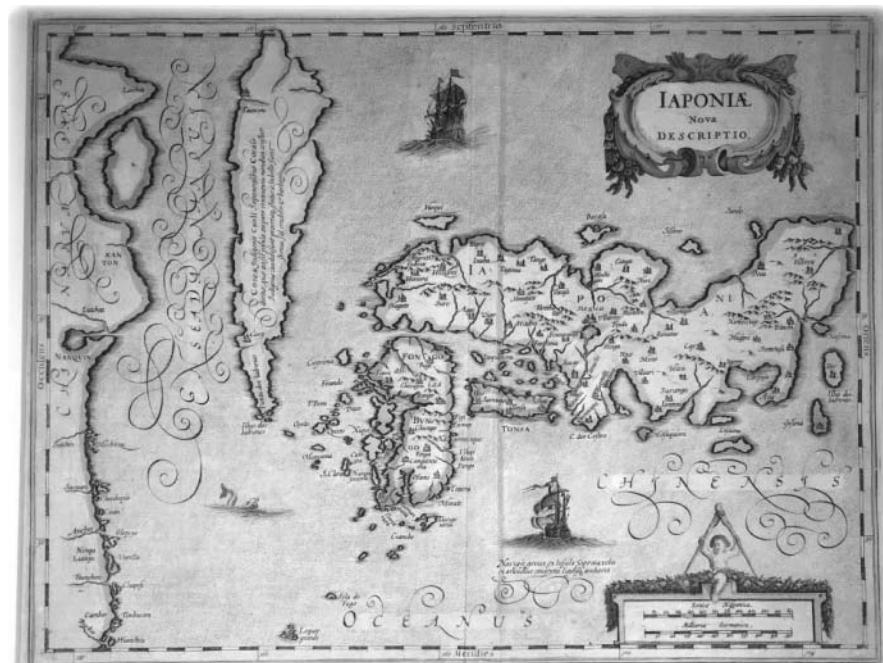
オランダの地図学者でヤンソンの義父でもあるヨドクス・ホンディウス 1 世が作成した世界地図。南北アメリカ大陸がかなり詳細に描き込まれているものの、日本やオーストラリアが実物以上に大きく描かれているなど、極東・オセアニア地域においてはまだ不完全である。

44. *Iaponiae nova descriptio*

ルイス・ティセラ, ゲラルドウス・メルカトル, ヤン・ヤンソン作

出版者不明 1706 年

本図はベルギーの地図学者アブラハム・オルテリウスが編集した地図帳『世界の舞台』(1570 年初版) の、1595 年増補版に追録された日本地図を元にしたものである。原図はイエズス会士のルイス・ティセラによるもので、この図にヤンソンがメルカトルの中国図の解説を付け加えて作成した。メルカトルは近代地図学の祖とされ、彼の考案によるメルカトル図法は目的地への航路の角度を読みやすくするという目的を持った、船の時代特有のものである。



参考文献

- Japan Knowledge Lib <http://japanknowledge.com/library/>
 - ・デジタル大辞泉（オンラインデータベース）
 - ・国史大辞典（オンラインデータベース）
 - ・日本大百科全書（オンラインデータベース）
 - ・日本国語大辞典（オンラインデータベース）
 - ・日本人名大辞典（オンラインデータベース）
 - ・日本歴史地名大系（オンラインデータベース）
- 『万葉集東歌紀行』 岸哲男著 三彩社 1990.11
- 『ユークリッド原論』 ユークリッド原著 I.L.Heiberg編 中村幸四郎[ほか]
訳・解説 共立出版 1971.7
- 『近世技術の集大成：デ・レ・メタリカー全訳とその研究』 アグリコラ著
三枝博音訳著 山崎俊雄編 岩崎学術出版社 1968.3
- 『天文対話』（岩波文庫） ガリレオ・ガリレイ著 岩波書店 1979
- 『古地図抄：日本の地図の歩み』 室賀信夫著 東海大学出版会 1983.10